idea

ニュースレター「イデア」

2023. 9

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、
「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

1｜二言三言｜
一般社団法人久保川イーハトーブ自然再生研究所
主任研究員　佐藤良平さん（前編）
3｜団体紹介｜　一関マジックの会
5｜地域紹介｜　下大原自治会（大東）
7｜企業紹介｜　ミドリ千厩工業株式会社（千厩）
8｜博識杜のフクロウ博士｜　地域運営の落とし穴㊳
今すべき「安心安全」の取組み
9｜センターの自由研究｜
いにしえの道ファイル№1「花泉～気仙沼①」

今月の表紙

かつては農家の必需品だった「箕」。様々な種類がありますが、この箕はスズタケを横に、桜の皮を縦に編み込んでいます。製造は容易ではなく、3代続く現存の市内某製籠店でも「作れない」そうで、東磐井地域では小梨村（当時）の物産として「箕」と記載されている程度（明治35年時点）。そんな「箕」は、ある「道」を通り、ある「生活必需品」と交換されていました。（自由研究）

idea
発行　いちのせき市民活動センター　せんまやサテライト
〒021-0881　一関市大町4-29 なのはなプラザ4F　Tel 0191-26-6400　Fax 0191-26-6415
〒029-0803　一関市千厩町千厩字町149　Tel 0191-48-3735　Fax 0191-48-3736
ホームページ：https://www/center-i.org/　メール：center-i@tempo.ocn.ne.jp

おしらせ

募集　「一関マジックの会」会員募集

本誌「団体紹介」でご紹介した「一関マジックの会」は、会員のマジックの修練と、市内外のイベントでマジックを披露し、子どもも大人も楽しんで心豊かになっていくことを目的に活動しています。現在、一緒に‘マジックでまちを盛り上げる’仲間を募集しています。

詳しくは下記までお問合せください。

活動内容：例会の開催（下記）、各種イベント出演、福祉施設などへの慰問等
例会日時：毎月第3土曜日
午後14時～16時
※変更になる場合あり
場所：一関市山目市民センター
会費：3,000円／年
問合：090-8178-2376
（事務局長・小山）

情報　「特定非営利活動法人 多文化共生 Ican」設立のお知らせ

令和5年7月5日、「特定非営利活動法人（NPO法人）多文化共生 Ican（アイキャン）」が一関市から設立認証を受けました。同法人は、多文化共生社会の安定と発展に寄与することを目的に、増加傾向にある在留外国人に対して日本語学習環境の充実、第3の居場所の提供を行います。具体的には、在留外国人への日本語指導、市民対象の異文化理解講座などを計画。詳しくは下記まで。

法人名：NPO法人 多文化共生 Ican
設立認証日：令和5年7月5日
事務所：なのはなプラザ4階
（市民活動事務室内）
問合：090-2361-1469（理事長・鈴木宏）

募集　「げいび大獅子太鼓の会」会員募集

旧東山町を拠点に活動している「げいび大獅子太鼓の会」では、一緒に活動してくれる会員を募集しています。

平成2年に発足し、子どもから大人まで活動している同会は、稽古を通して礼儀作法を学び、地元のイベントをはじめ、様々な舞台に出演しながら活躍の場を広げています。太鼓未経験者でも参加OK！体験・見学も受け入れています。詳しくは下記までお問合せください。

練習日：毎週土曜日
18時30分～20時
練習場所：松川町郵便局隣のホール
（一関市松川市民センター向かい）
問合：0191-47-3141（会長・菅野）

募集　「ハチヤマル」「玉ねぎ苗」等出品者募集中（道の駅かわさき）

川崎町にある「道の駅かわさき」内の産地直売施設「ふれあいドンと館」では、野菜全般の出品者を募集しています。特に干し柿用の「ハチヤマル」や「玉ねぎ苗（品種指定なし）」、「ネギ」、端境期と冬場にかけては「葉物野菜」が不足します。

川崎地域以外からの出品者も大歓迎で、組合員にならずに出品することも可能です。詳しくは下記まで。

募集内容：「ふれあいドンと館（道の駅かわさき内）」への野菜などの出品者
※惣菜の出品者も随時募集中
出品条件：要相談（組合員への加入有無含め）
問合：0191-36-5170（店長・藤原）

イベント　「せんまや本町アートフェスティバル」

千厩町本町の空き地・空き店舗などを活用したアートイベント「せんまや本町アートフェスティバル」。

一関ゆかりのアーティストを中心に絵画やインスタレーションなど様々なジャンルのアート作品を本町の各所で楽しむことができます。詳しくは下記まで。

日時：2023年10月7日（土）～9日（月）
10時～17時（9日は15時まで）
会場：一関市千厩町本町商店街およびその周辺施設（酒のくら交流施設、熊谷美術館）
入場料：無料
問合：0191-52-2606
（事務局・伊庄整体ヒーリング）

イベント　「イチコレ2023」開催のお知らせ

‘モデルが主役’のファッションショー「いちのせき市民モデルコレクション（通称：イチコレ）」。開催10年目にあたる今年は、「イチコレ第4回コンテスト」をメインに、小学5年生～中学生が手作りの衣装で登場する「イチコレSchool」、染色作家でファッションデザイナーの二宮柊子氏プロデュースの「10周年特別コレクション」などのショーのほか、物販等も企画しています。詳しくは下記まで。

開催日：2023年9月24日（日）
時間：＜全体＞10時30分～14時
＜ショー＞11時30分～13時
会場：なのはなプラザ2F
にぎわい創造センター
問合：0191-26-6400
（いちのせき市民活動センター）

まちの写真展

スタッフがまちの１コマを切り取ります。

作品名「ハートの白鳥でメルヘンに」

昨年度から「霜後かあちゃんクラブ（SGK21）」を中心に、集会所敷地内の花壇に趣向を凝らしている霜後地区（一関市萩荘）。今年は白鳥をテーマに、地元の大工に白鳥を作ってもらい、その他はペットボトルや洗剤ボトルなどを活用したのだとか。2年連続での登場です！

旧町村別の人口動態等を共有します。

2023年8月1日付
（2023年7月31日現在住民基本台帳より）
※外国人登録者含む

一関市全体		前月比
人口	108263	-105
世帯数	46413	-1
出生数	34	-19

	人口	前月比	世帯数	前月比
一関	54123	-2	24566	7
花泉	11960	-36	4709	-11
川崎	3221	-4	1278	-2
千厩	9815	-18	4107	-2
大東	11842	-33	4905	-3
東山	5857	-12	2276	2
室根	4365	4	1792	5
藤沢	7080	-4	2780	3

174 / 108,263

佐藤良平

「一般社団法人久保川イーハトーブ自然再生研究所」主任研究員として久保川流域の生態系保全活動等に取り組む傍ら、岩手県が委嘱する「環境アドバイザー」としても活動中((公財)日本生態系協会による「こども環境管理士」２級資格保有)。「岩手日日新聞」で月２回連載する「里山スケッチ」は来年で10年目。昭和62年東京都生まれ、花泉町在住。

耕作放棄地での、既存ため池の「かいぼり」作業の様子

第109回　一般社団法人久保川イーハトーブ自然再生研究所 主任研究員　佐藤良平　×　いちのせき市民活動センター センター長 小野寺浩樹

本当の「自然の豊かさ」とは
～生物多様性の「質」を高めて【前編】～

一関市萩荘の久保川流域(支流栃倉川含む)の羽根橋から上流側、立石地区までの里地里山を名付けた「久保川イーハトーブ世界」[※1]。平成12年頃から生物多様性の保全と再生が図られ、平成21年には、自然再生推進法に基づく「自然再生事業」の対象地域として「久保川イーハトーブ自然再生協議会[※2]」を設立。同会の活動には、我々市民が今まさに意識すべき視点が多々含まれています(2回シリーズの前編)。

小野寺　「久保川イーハトーブ世界」は聞いたことがあっても、実態を知らない市民は多いです。どういうエリアでしょうか。

佐藤　現在の日本から失われつつある「里山の景観」と「生物多様性」が大変良質な状態で残っている場所です。10㎞に渡る流域規模で良質な里山の景観と生物多様性が維持されている場所というのは、おそらく日本にはここ以外にないと思います。

小野寺　日本唯一ですか！

佐藤　平成21年に環境省認可の「久保川イーハトーブ自然再生協議会」を設立し、自然再生の活動をしていますが、同様の団体からの視察や、海外からの研究者が来ます。世界からも「里山の自然を保全している団体・地域」として注目[※3]されています。

小野寺　平成12年頃から活動は始まっていたと聞きました。具体的にはどのような活動を？

佐藤　簡単に言えば自然再生事業を行っている市民団体ですが、自然再生推進法に基づく活動であり、専門家や地域住民、関係行政機関や企業など、多様な主体が参加しています。「自然再生事業実施計画」を作成し、その中の大きく３つの事業に取り組んでいます。

小野寺　全国に26しかない協議会の１つということですが、大きく３つの事業の中身とは？

佐藤　１つ目はため池を中心とした水辺環境における、ウシガエルなど「侵略的外来種[※4]」の防除です。２つ目は管理放棄された雑木林などの間伐や下草刈りです。３つ目は耕作放棄地となった水田やため池を利用したビオトープ[※5]作りです。これらの活動を通じて里山らしい景観と生物多様性の保全・再生を図るとともに、保全・再生された自然を活かした環境学習などを通じて、地域内外交流の活性化を目指しています。

※1　平成27年、同名称で環境省より生物多様性保全上重要な里地里山に選定。
※2　事業実施者は「一般社団法人久保川イーハトーブ自然再生研究所」、その他役割を中央大学や環境分野のNPO、当該地域住民等が担う。
※3　日本ユネスコ協会連盟の第１回「プロジェクト未来遺産」にも登録され、同協会の未来遺産運動に協賛する企業が自然再生作業に参加している。

小野寺　「良質な生物多様性が残っている」という久保川でも、大々的な「自然再生」を行わなければいけないのですか？

佐藤　確かに「自然が豊か」には見えると思いますが、実は平成12年以降、自然環境の「劣化」が始まっています。「一関の魅力は何か」と聞かれると「自然が豊か」と答える人が多いですが、その「質」を知っている人は少ないでしょう。見た目には豊かそうに見えても、中身はかなり劣化しているんです。

小野寺　「自然の質」という視点、すごく共感します。学生などは特に、一関の魅力を「自然が豊か」と教科書の回答かのように一様に答えますが、「緑が多い＝自然が豊か」という発想でしかないように感じられます。手入れがされていない、つる草だらけの荒れた山も増えているのに……。

佐藤　他の地域と比べれば、確かに自然が残っていて、だからこそ、早めに様々な取り組みをしなければいけないんです。生物多様性が維持されてきた久保川流域でも状況が悪くなってきていて、それでも希少な在来種や景観がかろうじて残っている＝「まだ間に合う」から、今、「自然再生」をするのです。

小野寺　なるほど。久保川の「劣化」は何が原因ですか？

佐藤　「侵略的外来種」の進入や耕作放棄地の増加、全国的な気候変動など、要因は様々で、見た目には変化していなくても、生き物がどんどん減っています。久保川流域は内陸山間部に位置し、人の往来が困難な上、水源の乏しさや岩盤が非常に硬いせいで開拓の歴史が浅いんです。そのため、水源確保を目的に約600個のため池が作られ、土側溝を利用してあぜ焼きを行う水田が現在も営まれています。このような人の暮らしと自然環境が合わさって地域固有の生物多様性が築かれてきたのですが、平成22年を過ぎるとネオニコチノイド系農薬散布や圃場整備の波がやってきてしまって……。

小野寺　確かに同じ田んぼの中でも、この20年程の間に、農薬や肥料など、様々近代化はしてますね。ちなみに、「再生」と言った時に、理想とする年代・時期はあるのでしょうか？

佐藤　当地域が目指すのは昭和の頭から40年代くらいの里山の景観ですね。その時代は里山の自然が、人間の暮らしや営みにマッチしていたので、人間が意識せずとも、自然と共存し、里山の生き物も発展しました。

小野寺　人間の営みによって発展した生き物もいるんですね！

佐藤　田んぼにいるアマガエルなどの生き物は、田んぼの増加とともに増えたはずですし、クワガタやカミキリムシもそう。人間が薪炭を目的に雑木林で樹液の出る木を残してきたから発展したんだと思います。

小野寺　すごい！でも耕作放棄地も山の手入れも、危機感は持っていても高齢化で手がかけられないという現実もあり……。

佐藤　今は当事者や一部の団体任せになっていますが、持続性や先を考えると、大きな団体や企業、行政との連携の必要性があります。景観に加えて、今は「生物多様性」も意識されています。自然と言っても、山、森、川、池、田んぼ、畑、と、様々なタイプの環境がありますよね。そういった色々な自然の環境の中に、そこに見合った、その場所に順応した生き物が棲んでいる。その全体が生物多様性です。その中にもさらに生態系の多様性、種の多様性、遺伝子の多様性など、色々とありますが、その全体の質が「自然の質」だと私は考えています。

小野寺　見た目の豊かさはほんの一部分ということですね。

佐藤　さらに言うと、手入れをしていたいわゆる里山と、手つかずの自然との「連結」が一番大切です。一関の場合は栗駒山系など、原生的な自然もすごくよく残っている。でも人の生活圏と交わるところでは、自然がないがしろにされてしまうこともあって。個々の自然だけでなく、それぞれのつながりを断ち切らないことが重要です。

小野寺　つまり久保川流域だけの取り組みではなく、全市的、全県的な取り組みであるべきなんですね。自然の豊かさが一関の価値なのであれば、それが一関全体の価値の創造になる、と。

【後編に続く】

※4　外来種の中で、地域の自然環境や人の生活に大きな影響を与え、生物多様性を脅かすおそれのあるもの。
※5　本来その地域に棲む様々な生物が安定して生息できる空間のこと。特に水と植物が作る環境(水辺)を指すことが多い。ここでも人工の水辺を指す。

団体紹介

一関マジックの会

平成17年12月に「マジック研究会」としてスタートし、平成22年１月に「一関マジックの会」に改称。毎月第３土曜日の例会ほか、市内外のイベントに参加、福祉施設等への慰問活動などにも取り組む。現在の会員は７名。

住所　一関市山目字館64-72（事務局長・小山）
TEL　0191-21-0148　／　090-8178-2376
FAX　上に同じ

写真：千厩夜市に参加したときの集合写真（平成24年）

「マジック」が生み出す「笑顔」の連鎖

一関マジックの会

マジック未経験者たちでスタート

子どもからお年寄りまで、各種年代の笑顔に溢れるたくさんの写真たち。取材時に見せていただいた同会の活動記録写真の数々からは、見ている側・披露している側の双方が楽しんでいることが、臨場感を持って伝わってきます。

介護老人福祉施設職員の「利用者を楽しませたい」、婦人交通指導員の「交通安全教室の際に、ただの指導ではつまらないので何か余興的なものを覚えたい」など、「自身が普段携わる活動をより良くしたい」という思いが共通した仲間たちでスタートした「マジック研究会」。

結成はしたものの、当初はマジックの経験が無い素人の集まり。マジックを教えてくれる指導者を探していた時、会員が偶然、「カトリック一関教会」のクリスマス会でマジックを目にします。

披露していたのは、マジックが趣味だった同教会の世話人（当時）・阿部輝雄さんで、さっそく阿部さんを指導者に迎え入れることに。阿部さんからマジックの技を教わると、幼稚園のイベントに出演するなど、次第に活動の幅を広げていきました。

平成22年1月、マジックの技が「ある程度、習得できた」という理由から、団体名を「一関マジックの会」に改称。結成時からの会員である菅原るみ子さんは、「結成した当初は、活動の拠点がなかったため、会員の自宅に集まって練習したこともあった。その後は、会員が勤務する職場を借りて練習するなど、精力的に活動してきました」と振り返ります。

市内外で活動 新しい技にも挑戦

「イベントごとなど、声がかかったら断らないのが我々のモットーです」と話すのは、同会の事務局長を務める小山峯雄さんです。その言葉の通り、同会では、市内の幼稚園や介護老人福祉施設、老人クラブ、民区のイベントなどにも積極的に参加し、マジックの披露をしてきました。

市内のイベントのみならず、会員のつながりで富山神社（山形県最上町）の例大祭にも約10年前から毎年参加（コロナ禍で自粛。今年は3年ぶりに参加）している同会。例大祭には、近くの幼稚園から園児たちも訪れますが、「神楽は子どもには少し難しいため、訪れた子どもたちを楽しませてほしい」と、宮司が同会にマジックの披露を依頼したのだとか。小山さんは、「子どもたちにマジックを披露すると純粋に驚き、少しタネを明かすと笑ってくれる。その表情の変化を見ていると、私たちも『もっと楽しませたい』という意欲が湧いてきます」と笑顔で話します。

同会では、マジック披露後にも観客を楽しませたいという思いから、「バルーンアート」や「南京玉すだれ」の修練にも励んでいます。

バルーンアートは、子ども主体のイベントで披露することが多く、風船で作った花やウサギ、キリン、剣などは子どもたちへプレゼント。南京玉すだれは、唄に合わせて様々な形に変化するすだれが、年齢に関係なく誰でも楽しめるという理由から、同会の芸に加え、修練中です。

自分たちも楽しんで目指せ20周年！

現在は、一関市山目市民センターを会場に、毎月第3土曜日に例会を開き、情報交換会やマジックの修練等の活動を行っている同会。会員同士の交流を深める機会として、決起集会や新年会なども行い、会員同士の交流の機会も大切にしています。

会員の鈴木民哉さんは、「当会の活動が長く続いているのは、コミュニケーションが上手に取れているから。お客さんを楽しませることも大事だが、自分たちも楽しむことが大事。それが長く活動を続ける秘訣かな」と微笑みます。

小山さんは、「マジックを見た人が『次は私のところでやって』と声をかけてきたり、いつも声をかけてくれる幼稚園などから『前回の〇〇〇（技）はしないんですか？』などのリクエストがあると、自分たちの演技が『ウケたのかな？』と感じ、とても嬉しい気持ちになります」と、語ります。

多いときは10人ほどの会員がいた同会も、高齢化などで会員数が減少。「人を楽しませること、喜ばせることが好きな人はぜひ入会してほしい」と新規会員を歓迎しています。会員がマジックを修練する機会を用意するとともに、マジックを通して、子どもにも大人にも「心の豊かさ」を届けられるよう、笑顔を絶やさずに活動し続けます。

Q.あなたにとって「マジック」とは？

事務局長（代表）

A. 自分も皆さんも楽しむ会

小山（おやま） 峯雄（みねお）さん

元々マジックに興味があり、研究会結成後の平成21年に入会。得意なマジックの技は、「消えるハンカチ」と「剣飲み」です。

会員

A. 皆さんの笑顔
そして私の笑顔

菅原（すがわら） るみ子（るみこ）さん

研究会結成時からの会員で花泉町在住。「南京玉すだれ」の会員の中で上位のスキル。得意なマジックの技は、「ハンカチの予言」。

- Photo gallery -

地域（民区）行事に参加

地域の行事でマジックを披露したときの様子（令和3年）。子どもからお年寄りまで、約30人の観客がマジックを楽しみました。

即興で披露

取材終了後、小山さん、菅原さんに南京玉すだれで様々な技を披露していただきました。写真は「東京タワー」です。

手作りの小道具

マジックで使用する小道具の中には手作りのものも。人を楽しませる華やかな舞台の裏には、地味で地道な作業もあります。

バルーンアート

イベント参加時に欠かせないのがバルーンアート。風船が様々な形に変わる様子は、子どもたちの心を掴みます。

「これから」を見据えて　改革と交流

大東　下大原自治会

下大原自治会（大原）

一関市役所大東支所から西に約1.5km程に位置し、県道10号線沿いに約２km、砂鉄川沿いに約1.5kmのエリア。約50戸125人が暮らし、７班体制（小字は烏神、下烏神、折坂、跡ノ沢、角明沢）。自治会化は平成５年だが、それ以前から部落会等での活動あり。総務部、厚生部、納税部、文化部、自主防災会で構成。県道の草刈りも受託している。

左の写真：「下大原祭り」での乾杯（令和５年７月）

少子高齢化だからこそ、繋がりを大切に

「日本一社」を謳い、子孫繁栄にご利益があるとして、かつては近隣町村から奉納祈願に訪れる人が多くいたという「金烏神社」を有する下大原自治会。勧請年や由緒は定かではない（遷座した説もあり）ものの、昭和６年生まれの宮本宮司によると「少なくとも自分が34代目」と、歴史の深さを感じさせます。

しかし、皮肉にも同自治会の10代以下人口はゼロ。林業（炭焼き）等でこの地に移り住んだ家も多く「一次産業では暮らせなくなり、進学や就職で出て行ったきりの人が多いんだよね」と、区長の千葉忠一さんが分析します。

そんな同自治会で今年７月、３年ぶりに開催されたのが「下大原祭り」。自治会館（むつみ会館）に住民が集まり、生ビールと焼き鳥・焼肉を楽しみます。20代の男性が２人いたので話を聞くと、１人は３世代（父・祖父）で参加しており、もう１人は現在は別の自治会に居住しているものの、誘われて帰省がてら参加しているとのこと。「誰もが参加できるコミュニケーションの場」と位置付けられた事業の通り、20代から90代まで、様々な交流が生まれていました。

「反省会」に代わる飲みニケーションの場

「下大原祭り」は文化部の中の「スポーツ振興会」が担当しています。同会は各種スポーツ事業（大原地区・大東地域）の参加者調整や、その後の反省会（慰労会）の企画運営などを担っていましたが、人口減少でスポーツ事業への参加が困難となり、反省会という名のコミュニケーション機会が消えてしまいました。

そこで、スポーツ事業の反省会のように、年齢や性別に関係なく、かつ１戸から何人でも参加できるようなコミュニケーションの場として、20年程前から開催しているのが「下大原祭り」です。

同様の事業に忘年会があり、新年会は各戸の代表者が参加するのに対し、忘年会は会費制で誰もが参加可能としています。

そうした事業の様子は『すもはら通信』と題した自治会報で発信しますが、この通信は令和４年度から発行し始めたもの。「コロナ禍で集まる機会がなくなったり、高齢になって地域活動に参加できなくなった先輩方にも『こんなことやってるのよ』と伝えたくて始めました」と、自治会報を担当する事務局の松田恵美子さん。２か月に１回行う資源回収のお知らせや収入の報告も欠かしません。

コロナ禍を背景に「見直し」と「始動」

「課題は山積している中で自治会長になり、やれるところからやっていこうと思っていた矢先にコロナ禍。飲食を伴う事業は歓迎されなかったので、組織改革に着手しました」と振り返るのは自治会長の伊東公浩さん。まず始めたのは月１回の事務局会議でした。

事業の打ち合わせだけでなく、地域住民の声や要望なども共有し合う中で、自治会規約や会館使用のルールが古い情報のまま止まっていることに気づきます。それらの見直しを行いながら、令和４年度は自主防災会の発足準備も進めました。

発足に向けた仕組みづくりに尽力した副会長の小山恵義さんは「周囲から発足を促された背景もありますが、独居世帯が増える中で、災害に備える必要を感じ始めていました。特に『共助』を大事にしています」と、今後の暮らしを見据えた決断背景を語ります。

令和５年度の総会で設立が承認されると、６月にはさっそく「自主防災セミナー」を開催。組織図や連絡体制の確認のほか、初期消火訓練や「給食班」による炊き出し訓練も行いました。

「給食班員」「防災班長」は各班から選出しますが、１年輪番制の通常の班長とは別に選出（任期２年）。その役割も明示しています。

今年度は防災マップの作成も予定しており、事務局とともに防災班長が自治会内の巡視（点検）を行いながら、危険箇所の把握・周知を行うのだとか。

「各種改革・見直しの背景には、縦割りの活動をなくし、有志の横断的な活動を主軸にしたいという思いがある。男女や年齢の区別なく、シンプルな関係性が、人口減少下の自治会では必要なのでは」と、伊東さん。中堅となる事務局会議と、先輩世代も含む役員会とのキャッチボールを繰り返し、地域住民に寄り添った自治会運営の先には、「烏神さま」が新たな命をもたらしてくれるかもしれません。

Q.集落の自慢は何ですか？

自治会長

A.繋ぐ

いとう　きみひろ
伊東　公浩さん

２期４年目。副会長を４期12年務め、コロナ禍と同時に自治会長へ。勤務の傍らで、集落内の史跡周辺の環境整備もこなしています。

自治会副会長

A.対話と協力

おやま　けいぎ
小山　恵義さん

２期４年目。事務局長を４期12年務めた後、現職へ。自治会改革の立役者。今年教員を引退し、趣味のゴルフも楽しんでいます。

- Photo gallery -

ほぼ全戸参加の総会

「総会は全戸が参加するもの」という意識があり、コロナ禍前はほぼ全戸が総会に参加。終了後には懇親会も行っていました。

頼りになる事務局さん

令和３年度から毎月行っている「事務局会議」のメンバー。この３人＋会長・副会長で、「作戦会議」をしています。

新設の「給食班」

令和５年６月に初開催した自主防災セミナー時の炊き出し訓練の様子。給食班は塩おにぎりを30個作りました。

通称「100円店」

集落内の先輩方が営む（自治会とは別組織）無人販売所。毎朝商品を並べ、夕方の精算時にする「話し語り」が日課です。

企業紹介

千厩　ミドリ千厩工業株式会社

安全衛生保護具(フットウエア、ユニフォーム・アパレル、安全衛生保護具、環境改善機器、電気計測器、自動車用内装レザー等)の総合メーカー「ミドリ安全株式会社」の100%出資子会社として、昭和49年に操業開始(当時の社名は「千厩工業株式会社」)。平成29年、現在の「ミドリ千厩工業株式会社」に社名変更(それまでは「ミドリ安全株式会社　千厩工場」の看板も掲げていた)。

民間企業・消防活動向け安全靴、陸上自衛隊用の戦闘靴、警察用紳士靴や学生用ローファーなど、年間約45万足を生産し、「働く人の『頭』から『つま先』まで守る」ミドリ安全グループの一子会社として、様々な現場で働く人の「足元の安全」を守っています。

警察・消防・自衛隊　地域を守る職の「足元」を守る

「安全草履」から「安全靴」へ

庶民の日常的な履物が「草履」だった昭和25年頃。危険な環境・条件での作業も草履で行われ、鉄骨が足元に落ちてきて負傷したり、火花が足元に飛んで火傷を負うなどの事故が多発していました。

昭和27年に安全衛生保護具の総合メーカーとして創業した「ミドリ安全株式会社(創業時は緑災害防具株式会社)」は、そうした事故から働く人を守るため、草履のつま先部分に金属製の「先芯」を取り付け、ソールには古いゴムタイヤや帆布を使用した「安全草履」を製造。昭和30年代には革製安全靴の規格が制定されるなど、日本中に「安全靴」が浸透し始めました。

安全靴の需要増に応えるとともに、冷涼な製造環境(製造機器は約15０度の高温を発生する)を求め、昭和39年、福島県に安全靴工場を、次いで山形県にも設立します。

当地においては、当時の千厩町が「駒場工業団地」の第1号企業として誘致。昭和49年5月、同社の100%出資子会社として「千厩工業株式会社(後の「ミドリ千厩工業株式会社」)が設立、操業を開始します。

使用者だけでなく、その家族、地域、日本を守る

「ミドリ安全株式会社」には各種分野の関連企業ネットワークがあり、安全靴や作業靴を製造する「フットウエア部門」に「ミドリ千厩工業株式会社」は属します。同部門の中でも、同社が担当するのは、アッパーが本革、ソールがゴム・ウレタンで構成される「革製安全靴」「作業靴及び紳士靴・学生靴・防衛省用戦闘靴」の製造です。

「釣込(先芯の装着や成型)」「底付(靴底やヒール芯の圧着)」「仕上げ」と、製造過程は大きく3つの工程で構成されますが、「工場・消防活動用の靴」「陸上自衛隊の戦闘靴」「警察向け紳士靴」など、用途によって必要な性能が異なるため、その製法はそれぞれ異なります。

「加硫剤を調合したゴムは一定時間内に圧着しないと固くなりすぎてソールが剥がれやすくなる。だからスピード勝負。現場でソールの剥離などが起きては、働く人の身を守ることができない」と、取締役工場長の天笠貴之さん。製品の性能試験などにも抜け目なく取り組み「JIS認証に恥じない靴づくりを心掛けている」と胸を張ります。

「安全・健康・快適職場への奉仕」という理念のもと、社内においても社員の安全・健康・環境面に配慮を怠らない同社。社員の半数以上が周辺地域に居住し、80名の従業員のうち30代以下が26人と、若い世代も多数働いていますが、市内高校生のインターンシップ受け入れや、地元中学校の職場体験受け入れなど、積極的な企業PRを続け、高卒採用にも力を入れています。

大規模な災害等が発生すると、陸上自衛隊員用の靴の生産が2倍以上になるなど、緊急的な対応が求められることも。「足元の安全」を守ることで、「安心安全な暮らし」も支えています。

1 取締役工場長の天笠貴之さん。
2 工場・消防活動向け安全靴製造に使用する、起毛、糊付けロボット。
3 品質管理を行うための機械。品質管理は厳格に行われています。

DATA
〒029-0803
一関市千厩町千厩字下駒場128-4
TEL 0191-52-4101

今月のテーマ

地域運営の落とし穴㊳

今すべき「安心安全」の取り組み

第54話

「安心安全」を脅かす「目に見えない危険」

先日、ある地域協働体の地域づくり計画の見直しワークショップで、‘安全安心’に関する課題・取り組みの考え方について、以下のような意見が出ました。

「地域づくり計画」を策定し始めた時期は、‘安心安全’と言えば‘地域防災’がメインだった。その後、自治会マップを作ったりしながら、ある程度、地域防災の取り組みは落ち着きを見せた。治水対策も行われた。

‘地域防災’の意識は常に持っていなければいけないが、**今の時代に取り組まなければいけない＝私たちの安心安全を脅かしているのは、SNSや特殊詐欺など、個人をターゲットにした‘迷惑行為’や‘犯罪行為’なのではないか。**

中高年世代の中には、「特殊詐欺が怖いから固定電話は取らないようにしている」という実態もあるようで、自治会の連絡などすら行き届かない状態になることを危惧していました。かと言って、自治会で「LINE」をやろうとしても、年代によっては使いこなせないため、単に情報伝達手段をSNS等の電話ではない媒体に切り替えれば解決することではなく、そもそもの‘地域防犯の取り組み’が必要だという流れに。

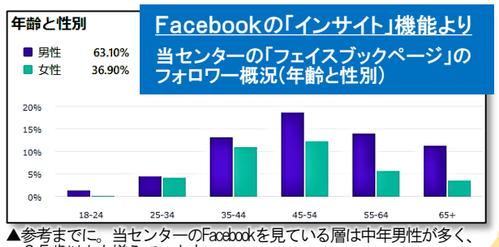
そんな中、また著名人の自殺報道がありました。SNSの書き込みが原因ではないだろうか？という推測もあります。SNSのコメントは、コミュニケーションが取れる楽しみがありつつも、見ず知らずの人からのコメントや、辛辣な書き込みもあり、その取扱いには注意喚起がされ続けています。しかし、一向に収まる気配はありません。

SNS問題は、誹謗中傷の書き込みだけではなく、‘寿司テロ’に代表されるように、迷惑動画の拡散行為も記憶に新しいどころか、現在進行形で続いています。迷惑動画の拡散については、「迷惑行為をした人」が大々的に取り上げられることが多く、「動画を撮影しアップロードした人」はあまり取り上げられないことが不思議で仕方ありません。迷惑行為を面白がっていないで注意できなかったものだろうか？迷惑行為をした人、動画を撮りアップロードした人、どちらも同罪ではないかと……(迷惑動画の撮影と投稿をした人が「威力業務妨害の疑い」で逮捕された事例もあり)。

子どものインターネット使用のルールについては、学校教育の一環でも指導しています。さらに一関市では、市民センターの共通事業(34ある全市民センターの共通テーマ)としても取り組んでいます。しかし、具体的な取り組み内容としては、「各家庭で使用時間を決める(ための周知)」というような、学校と変わらない内容を事業化していることも多く……。地域づくりや社会教育の視点で立案をするなら、上述のような社会問題があることから、**「安心安全にインターネットを利用するためにはどうすれば良いのか」という、「ルールなどを学ぶ機会」を提供してほしい**ものです。なぜなら、現代社会は‘情報’で溢れていて、何もしていなくても情報が入ってくるからです。主体的にインターネットを利用していなくても、インターネットを介した情報には触れてしまうのです。つまり、**「制限」をかけるのではなく、実社会で安全安心に暮らせるように、「正しい使い方」「情報との正しい向き合い方」を、しっかりと教えないと、身近なところにこそ危険が潜んでいます。**

しかし、ここでまた問題が。子どもにはダメという大人が、長時間インターネットを使っているのです。ひと昔前はテレビがダメ、ゲームがダメの時代でしたが、今は、インターネットがダメ。ただ言語を変えただけで、注意している内容は「ダメ」でしかなく、時代は変化しても注意の仕方は変わっていません。

「DX(デジタルトランスフォーメーション)」など、デジタル技術を中心とした社会が形成されようとしている今、インターネット無しでは生活できないような状況になっています。そんな中、**‘注意の仕方’**が変わらないのは、**‘どう注意すれば良いのか’**が分からないからではないでしょうか。スマートフォンが登場し、簡単にSNSを使えるようになり、使いこなすことがゴールのようになっていますが、**使い方だけでなく、「情報を取り扱っている」こと、「コミュニケーションをとっている」こと、「インターネットの向こう側には、人間がいる」ということをしっかりと教えないと、この手の課題はクリアにならない**でしょう。



▲参考までに。当センターのFacebookを見ている層は中年男性が多く、６５歳以上も増えています。

センターの自由研究

ミッション80 いにしえの道「花泉ファイル№1　～気仙沼①」

室根町矢越（釘子）地区在住の方（90代）とお話しをしていた時のこと。「花泉の人たちが‘箕’を気仙沼に売りに行く時に、この辺りで１泊していった。帰りには塩と‘ベト（≒魚のアラ）’を持って帰って来た（のを見ていた）」というエピソードが飛び出しました。いわゆる「気仙沼街道」とはまた別のルートだったことから、「一般的な街道ではない道」に興味をもった我々。現地調査も交え、「いにしえの道」に想いを馳せてみました（新シリーズ！）　※記載内容はあくまでもセンター独自調査の結果です。

■小松峠経由の気仙沼への道

村史・町史などを見ていくと、当時の「陸上交通」として、各種街道が紹介されています。[※1] 当地域においては、古くは平泉に向かう道が重要であり、藩政時代には一関村・二関村に向かう道や、水運や市・宿場に通じる道が幹線道路のようになっていったようです。

特に「気仙沼街道」[※2]と呼ばれる花泉町金沢（金沢宿）を起点とし、北上川を渡り、薄衣・千厩・下折壁の各宿駅を通過し、浜横沢村から本吉郡気仙沼宿へ通じる道筋は、現在の国道２８４号線に通じる道も多く、歴史ある道として認知されています。

花泉から気仙沼に向かう人たちは、この「気仙沼街道」を通っていたものと認識していましたが、室根町釘子地区在住の方から次のようなエピソードを聞いたのです。

> 昭和20年前後の頃、花泉の人たちが「箕」などを気仙沼に売りに行くために、「小松峠」を通って行った。小松峠を抜けたら、「宿（室根町矢越の地名）」の辺りで一泊した。その際、賭け事をしていたような話もある。気仙沼からの帰り道には、「にがりがとれる状態の塩」と、「ベド（魚の頭や臓物）」を馬に積んで帰って来た。

なお、「室根の人はあまり使わない」「花泉の人が多かった」という補足情報もあり、**地域住民の往来に使う道というよりも、地域外の、何か特定の目的がある人が使用する道**だったと推測。

文献調査や各種ヒアリング調査とともに、実際に「この道ではないか」という道を通行してみることで、当時の生活の様子が見えてきました！

■約50㎞の旅の目的とは

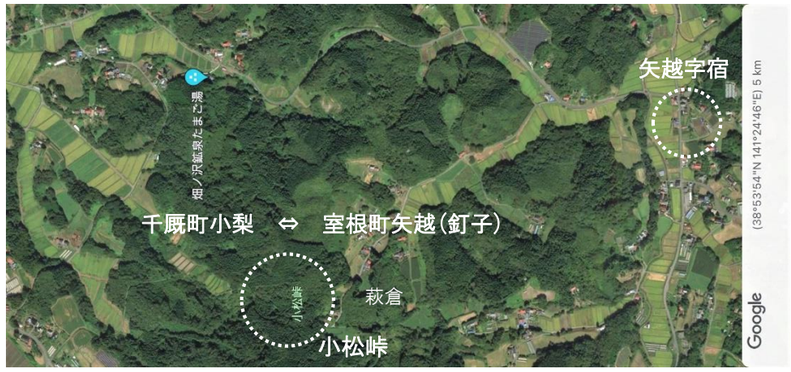
「小松峠」は、千厩町小梨と室根町矢越との境にある峠の一つですが、現在は峠付近の田畑所有者等が通行する程度です。**なぜその峠を越えていたのか**①含め、３つの疑問を調査することにしました！

②起点・終点・中継地点

「花泉」と言っても、エリアは広く、仮に金沢の人であれば、「気仙沼街道」を通った可能性の方が高いので、起点となる地区と、同様に「気仙沼」のどこを目指したのかを明らかにしたい。

③目的は何だったのか

花泉から気仙沼までの距離は、場所にもよるが**約40～50㎞**（ＪＲ清水原駅からＪＲ気仙沼駅までの距離（陸路）が約45㎞）。この距離を移動してまで必要な目的とは何だったのか。「箕」を気仙沼までわざわざ売りに行く必要があったのか。



※１　江戸時代の「街道」は、厳密には幕府直轄の「五街道」のみを指し、それ以外は沿道の領主の管理にゆだねられ「街道」という名称は用いられなかった。

※２　※１に関連し、当時は「気仙沼街道」とは呼ばれておらず、「○○への道」と、それぞれの地点から次の目的地までの名称で呼んでいた。金沢宿の場合は「薄衣への道」だった。

花泉→気仙沼「箕」と「塩」の関係性と道中を追ってみた

花泉から気仙沼に「箕」を持って行き、帰りに「にがりがとれる状態の塩」と「ベド（魚の頭や臓物）」を持って帰って来ていた人たちがおり、そのルートがいわゆる「気仙沼街道」とは異なっていたという今回のエピソード。

果たしてその目的や背景、ルートの全容とはいかなるものなのか、２号に渡ってご紹介します！

疑問①　なぜ「小松峠」を越えたのか

現在の小松峠の様子。車の通行も可能（路面状況等によっては不可）▶

「境界」であり「近道」でもある「峠」

「小松峠」は地図や文献等にも千厩町小梨と室根村矢越とを結ぶ峠として記載されており、その標高は262m。そもそも「峠」とは、山の尾根の峰と峰との間の低い部分を指し、小松峠は「大登山」と「観音山」の間にあります。この観音山の南には「砥石山」「黄金山」と続き、これらの尾根が小梨と室根の境界になっています。

峠は尾根の低い部分であり、小梨から室根の境界を越える際には、**峠を越えることが実質的な「近道」**なのです。なお、小梨から津谷川方面（至本吉町）に抜ける際の峠には**「新地峠」**があり、『津谷川の民俗資料』には「この道路は千厩が郡の中心都市である関係古くより往来せられた」と記載されています。「小松峠」も同様に、かつては小梨と釘子の往来に頻繁に使われていた可能性があります。

ちなみに、現在は千厩町小梨と室根町矢越との往来には、「一関市小梨市民センター」や「畑ノ沢鉱泉たまご湯」等の前を通過する道路を利用する人が多いですが、小松峠よりも起伏があります。

疑問②　起点・終点・中継地点

「花泉の人たち」「箕」というキーワードから、「箕」を作っていた地域を調べていくと、『花泉町史』の中に、「家内工業」として**「竹細工＝花泉・奈良坂・金沢」**という記載があり、「特産品」の項目の中でも「これらの家内工業は、生産が増えるにしたがって、**商品として農閑期には行商に、毎月ひらかれる金沢・涌津・清水・日形の市日に売りさばく**など結構収入の助けとなった」という記載が。ここでいう「花泉」は旧金森村・清水村を指すと推測され、金沢村寄りであることから、「箕」を作っていたとしても、金沢宿を起点とするいわゆる「気仙沼街道」を抜ける可能性があることから、起点を**「奈良坂（現在の小山沢・日向・西風・大又集落のエリア）」**に設定してみることにしました。

▲当地域で使用されていた「箕（当センター職員所蔵）」。明治36年当時の「物産」が記載されている『磐井郷土誌』には、小梨村に「箕」と記載があり、実際に「箕」を製造していた家も確認できました。

終点については、「塩」をキーワードに、製塩の歴史などを調べてみたところ、1910年の「塩業整備に関する法律」施行により生産性の低い塩田は廃止となっており、気仙沼でも同時期以降、明治時代のうちに基本的には終了していることが判明。しかし、太平洋戦争の勃発で塩の生産が激減、輸入も困難になったことから、塩は「割当配給制」になるとともに「自家用塩制度」が実施され、非常手段として自家用の塩の製造が認められたという歴史が（1942年）。そこで、当時の記録は見つけられなかったものの、今回は過去に塩田があり、室根からも比較的近い**鹿折地区**を終点に設定してみました。

肝心の中継地点に関しては、文献等を参考に**「奈良坂（花泉）→宿部落（老松）→日形の舟渡場→黄海（藤沢）→徳田（藤沢）→小梨（千厩）→釘子（室根）→笹塞峠→廿一（気仙沼）→手長山→鹿折地区」**というルートで検証することに！このルートの詳細は、次号で詳しくご紹介します。

疑問③　目的は何だったのか

疑問②で奈良坂（当時）を起点に設定したものの、わざわざ気仙沼まで行かなければいけないことに疑問が残ります。上述の『花泉町史』には、近隣で行われる毎月の市日で売りさばいていたとされており、農閑期の行商も、一関方面など、選択肢は他にあったはず……。そこで**注目したのが「持って帰って来た」とされる「塩」と「ベド」**です。時代背景を整理していくと、**戦中戦後の食糧難の時期**であり、**食糧や生活必需品は配給制**になっていた頃です。特に**「塩」は、配給品だけでは足りていなかった**ようで、生きていくために、**「闇取引」**のようなものが横行していたとされる頃です。そこから推測するに、気仙沼まで行った理由としては、**「現金収入」ではなく「塩」を入手することが目的**だったのでは……。闇取引の取締りなどの対象とならないよう、肥料として利用できる「ベド」も同時に入手し、ごまかしていたのでは……!?（あくまでも推測です）。

▲当地域で使用されていた「かて切り」※一関市民俗資料館所蔵

なお、気仙沼市で民具なども収蔵している「リアス・アーク美術館」の学芸員さんにお話を伺ったところ、**「気仙沼の中でも農村部の人たちが、浜の人たちと闇取引に近い物々交換をしていた**ようであり、花泉の人たちと物々交換をしていても不思議ではない（時代背景的に、相手が誰かは関係ない）。現に、**一関方面からは、大東の人たちが『かて切り』という道具を売りに来ていた**。気仙沼内でも竹細工は行われてはいたものの、良い道具であれば、交換に応じるのでは」との見解が。

また、「にがりがとれる状態の塩」で入手することで、豆腐を作ることができるため、「塩」として入手するのではなく、あえて製塩されきっていない状態で持ち帰っていたのではないかと推測します。

次号では推測される全ルートを地図でご紹介します！

※参考文献等は当センターＨＰにてご紹介しています。